

江戸に花開いた日本の最初

葛重がもたらす江戸ブーム

今年のNHKの大河ドラマ「べらぼう」葛重栄華乃夢斬は江戸中期から寛政年間にかけて書籍や版画の版元として活躍した葛屋重三郎の物語であるが、葛屋発行の東洲斎写楽の役者の大首絵は傑作として世界で評価され、一九一〇年にドイツ人美術史家ユリウス・クルトは『SHA RAKU』という書籍を出版して絶賛している。それ以外にもフィレンセント・ファン・ゴッホが歌川広重の「名所江戸百景」に感嘆し、何枚かを油絵で模写した作品も残存している。

約二二〇年間の鎖国時代にも、長崎の出島を経由して細々とではあるがオランダを中心とする西欧社会の情報は流入していたが、幕末に開国

するまで日本は浮世絵が象徴する独自の文化を育成してきた。それを出遅れと理解した明治政府は文明開化を標語として西欧を追跡するが、一方で江戸の文化は日本社会の根底にある精神を象徴する内容であり、評価すべきものも多数存在する。その一部を今回は紹介したい。

現代の視点から見直す江戸文化

冒頭に紹介した葛屋重三郎は日本で初期の広告に関係がある。江戸の有名作家の山東京伝は一七九四年に『金々先生造化夢』という小説を葛屋から発売した。その最後に京伝自身京橋銀座に開店している商店で発売した新型の紙煙草入の広告を掲載している。これには背景があり、京伝が三年前に発刊した三作の小説が幕府から処罰され、生活のため紙

煙草入の商店を開店していたので、広告宣伝が必要だった結果である。

司馬遼太郎の『愛蘭士紀行』に、大量の海藻が繁茂している海岸を眺め、アイルランドの人々が海藻を食用にしていたら、一〇〇万人が餓死した一八四〇年代の飢饉は軽減され、たかもしれないという文章がある。日本では中国からの伝来で奈良時代から海藻を「トコロテン」にして食用としていたが、江戸時代になって、放置されていた「トコロテン」が冬季に「寒天」になることを発見し、保存食品としても利用されるようになった。

豆腐は中国発祥で、中国に留学した僧侶などが製法を伝達し、『本朝食鑑』（二六九七）にも紹介されている。しかし庶民の食材となったのは江戸時代中期からで、一七八二年に出版された一〇〇種の「豆腐料理を紹

介した『豆腐百珍』が流行の契機となった。江戸、京都、大坂でサイズが相違し、江戸の豆腐は大型であり、一丁を四分して販売されていた。式亭三馬の『浮世風呂』に、独身のため豆腐一丁が食べきれず、早く結婚したいという文章がある。

江戸では全国各藩の江戸屋敷に武士が滞在していた結果、男性が女性の二倍の比率であり、外食の需要があった。職人や商人も仕事の合間に何度も簡単に食事をする習慣のため、寿司や蕎麦などを提供する屋台が一七世紀後半から登場した。正確な台数は不明であるが、数千の単位で存在していたとされ、外食が繁盛していた。当時は屋台に車輪が装着されていたので、亭主が天秤棒で運搬するか、道路の両側に定置するかであった。

公園のない都市に生活していた庶民の趣味は鉢植え植物であった。対象は一七世紀中頃にはツバキ、後半にはツツジ、一八世紀前半はカエデ、後半はカラタチバナ、一九世紀にはアサガオと変遷してきた。奇種

は高価で売買され、カラタチバナの奇種は一鉢で百両（現在の数百万円）という鉢植えまで存在していた。残念なことに、ここからメンデルの遺伝の法則を発見する学者は登場せず、珍奇な花卉に熱中したところに日本の限界があった。

六一〇年に朝鮮半島から来日した僧侶が紙漉きの技術をもたらしたとされるが、江戸時代には一大産業になり、一七三〇年代に大坂の市場に入荷した商品の金額はコメ、材木、和紙の順番であったほどの一大産業であった。とりわけ江戸時代は何人の有名作家が登場し、大量の出版用紙の需要が発生した。そこで各藩では農民に製紙を推奨したため、日常生活に和紙が浸透し、幕末に来日したロシアの使節は驚嘆したとこのとである。

外国の視点で日本を発見

ここまで紹介した六例に共通する特徴は、江戸時代の庶民の生活は質素ではあるが、余裕のある内容で

あったことである。ワシントン大学教授であったスーザン・ハンレーは一九八八年に執筆した『江戸時代の遺産・庶民の生活文化』で、ロンドンへ給水していた「ニューリヴァ」と江戸の「神田上水」を比較し、水量でも水質でも江戸の水道が優秀であったと説明している。この言葉が象徴するように、当時の江戸は世界の先端都市であった。

江戸文化は江戸にだけ集中していたわけではない。埼玉県川越市の中心市街には江戸時代の景観が維持され、岡山県津山市には参勤交代の通路であった出雲街道の宿場としての風景が残存しており、長野県南木曾町の妻籠宿には江戸時代を彷彿とさせる景観が保存されている。江戸時代という長期に安定した社会は全国に豊富な記憶を残存させているが、これを国際社会に発信することは地域だけではなく日本の重要な役割である。

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究することともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。